

藤原惺窩の經解とその継承

一 『詩經』 「言」「薄言」 の訓読をめぐる一

佐藤 進

1. はじめに

江戸幕府は、朱子学を官学にすえてその精神的基盤を確立しようとした。朱子学を官学化するにあたって最も重要な役割を担ったのは、よく知られるように林羅山(1583-1657)である。独学で朱子学に傾倒していた羅山に、徹底した朱子学にもとづく訓読を教授したのが藤原惺窩(1561-1619)であり、その惺窩は従来の古注による『五經』の訓読を、新注を取り入れた訓読に改めたのであった⁽¹⁾(阿部吉雄1965)。

本論は、『詩經』における平安鎌倉室町時代の、古注にもとづく博士家の訓読が惺窩によっていかに新注中心の読みに変わったか、さらにはそれが後世にどのように継承あるいは拒否されたかを考察するものであるが、古注と新注との間で大きく見解の異なる語「言」「薄」にかぎって観察する。また、江戸の折衷派の訓読の例として片山兼山のそれを調査したがあくまで参考にとどめ、今回は朱子学派の訓読継承関係を調査の対象にした。

なお本論は2008年3月28-29日に台湾大学で行なった国際シンポジウム「第五回・日本漢学国際研討会」(二松學舎大学21世紀COEプログラムとの共催)において発表した報告「藤原惺窩的經解及其継承：關於《詩經》「言」「薄言」的訓讀」にもとづき(報告書は『江戸時代日本漢學研究諸面向：思想文化篇』臺大出版中心2009年6月)、「薄言」のほか「薄」単独のデータを追加して、図版を添えて、本論の細部を若干書き換えたものである。ただ、論旨・結論に変化はない。

2. 主な『詩経』訓読資料

ここで扱う『詩経』の訓読資料は以下の9点である。(1)の原抄本(2)の原刊本はともに未見であり、複製本を利用した。(1)は『毛詩鄭箋』汲古書院1992により、(2)は『和刻本経書集成 正文之部 第一輯』汲古書院1976による。(3)から(7)までは手もとの家蔵原刊本を利用した。(8)(9)は二松學舎大学図書館所蔵本を参照した。決して網羅的なリストではないが、江戸前期から幕末までの代表的な訓読をうかがうには十分に代表的な資料になろう⁽²⁾。なお、各行末尾に示した略号は付表で用いた略号である。

- (1) 永正十八年(1521)抄写・清原宣賢(1475-1550)加点(静嘉堂文庫蔵)：清
- (2) 寛永五年(1628)藤原惺窩(1561-1619)点：安田安昌刊五経：藤
- (3) 承応二年(1653)林羅山(1583-1657)道春点：官版五経大全：林
- (4) 享保十八(1733)年道春点：新刻校正五経〔明暦三(1657)新版五経〕：林の〔 〕内
- (5) 安永二年(1773)山崎闇斎(1618-1682)闇斎点：五経〔明和年間刊の再刻〕：山
- (6) 天明四年(1784)片山兼山(1730-1782)山子点：毛詩正文：片
- (7) 寛政三年(1792)松永昌易：新刻頭書詩経集注〔寛文四(1664)頭書詩経集注〕：松
- (8) 安政二年(1855)後藤世鈞(1720-1782)芝山点：改正音訓五経〔天明七(1787)〕：後
- (9) 文化十年(1814)佐藤坦(1772-1859)一斎点：校定音訓五経：佐

(7)については、村上雅孝2005に寛文四年版と寛政三年版とを対照させた研究がある。それによれば、寛文版は道春点と同様に大幅に文選読みを採用するなど、ほとんど(3)に等しい訓読であるという。一方、明治期までに四度ほど刊刻された昌易点『詩経』は簡潔な読みにも改訓された寛政版の系統である。従って、江戸期の訓読を通覧するために、ここではあえて寛政版を資料にすることにした。(8)は天明七年の初版から数えて五刻目に当たる。これと明治新刻の芝山点『詩経』(一般に

は後藤点と称する)を較べると、後世になるほど欄外標注の音訓が減じているので、未見の初版は(8)よりも詳しい音訓であったはずであるが、今回の調査には安政二年版でも差し支えないと思われる。

3. 『詩経』の「言」と「薄」

『詩経』305篇のなかで、「言」字は173句内に201字が数えられる。その201字のなかで、「父母之言」(将仲子・一章)「諸兄之言」(将仲子・二章)のように、各家の間に異同なく「いふ」「こと」あるいはそれらの同義の語で読まれる箇所は考察の対象からのぞく。それ以外の96句100字は古注と新注の解釈の違いにもとづいて、資料(1)～(9)間に訓読の異同が見られるのである(付表参照)。

古注と新注との間の「言」字の解釈の違いというのは、「言」字が初出する葛覃・三章「言告師氏」句(付表01)において毛伝が「言、我也」と注し、それを受けた鄭箋が「我告師氏者…」と敷衍するのに対して(図1)、朱子の集伝は「言、辭也」いわゆる「語辭」であるとするそれである(図2)。

『詩経』の後文における古注では、毛伝・鄭箋は適宜に「言、我也」の注を挿入する。それに対して、後文における新注では「言」字に対する訓詁はつけられない。ただし、新注でも「言」を「我」の意で解することもあり、その場合には訓詁ではなく、詩意を敷衍する注解の中で「我」字をもって文を構成する。たとえば、都人士・四章「言從之邁」句(付表76)を「我從之邁矣(我れかれに從ってゆかん)」とするのがそれである。

しかし、朱子集伝がこうして明示的に「言」字を「我」と解する箇所は、ほかには采緑・三章「言韞其弓」句(付表78)を「我則爲之韞其弓(我れすなはち、かれがためにその弓をふくろにせん)」とし、同「言綸之繩」(付表79)を「我則爲之綸其繩(我れすなはち、かれがためにその繩をおさめん)」とするのが全てで、全篇中わずかに3句しかない⁽³⁾。

『詩経』で「辭也」と注が加えられる「言」を「ここに」と訓読するのは、平安時代からの訓読資料に見える。「ここに」は日本語の文の中で副詞ないしは接続詞

として用いられるもので、築島裕 1963 は

「ココニが副詞乃至は接續詞として用ゐられる場合としては、『於』『此』『云』『是』『時』『茲』『斯』『粵』『越』『言』『焉』『爰』『于』などの例がある」

と言ってそれぞれの用例を紹介する。「言」については先ず図書寮本『名義抄』の所引の『善珠』の「言、去、爾」をあげ、さらに「言（ここ）に帝京に反らんとするに、忽に二紀たらまくのみ」〈知恩院・三藏玄奘法師表啓初期點〉と「言（ここ）に真相を尋ね」〈石山寺・大唐西域記長寛點〉の二例を挙げる。

また大坪併治 1981 にも同様の指摘があり、「言」の用例として築島裕 1963 の挙げる例のほかに、「既に誠願を遂げて、言（ここ）に本朝に歸る」〈興福寺・三藏法師傳承徳點〉を加え、三例をかかげている。築島・大坪のかかげる三例がいずれも仏教関連の訓点であることが興味深い⁽⁴⁾。

『詩経』305 篇のなかで、「薄」字は 31 句内に 32 字。その 32 字のなかの「薄薄」（載驅・一章）「薄冰」（小旻・六章および小宛・六章）のように「うすし」の義で読まれる箇所は考察の対象からのぞき、残り 29 字を調査の対象とする。

「薄」については「薄」単独で使用される場合と「薄言」という構造で出現する場合とがある。「薄言」は芣苢篇に六句（付表 05・06・07・08・09・10）、采芣篇、柏舟篇、出車篇それぞれに一句（付表 15・18・49）、采芑篇に二句（付表 56・57）、采緑篇に二句（付表 77・80）、時邁篇、有客篇それぞれに一句（付表 92・95）、駟篇に四句（付表 96）、都合十九句が存在する⁽⁵⁾。

助字「薄」が単独ではじめて出現するのは葛覃・三章「薄汗我私」（付表 03）である。ここには毛伝・鄭箋はなく、集伝に「薄猶少也」とあり（図 2）、『詩経大全』には「慶源輔氏曰薄猶少畧也」とある（図 5）。「薄」字を惺窩点のように「ほほ」と訓読するのは、この集伝と大全、ことに「畧」を利用する大全によるものであろう。『詩経』の「薄」を「しばらく」と訓読するのは、『類聚名義抄』「少」に「しばらく」のいわば定訓があることによる。一方、「いささか」と訓読するのは、出車・五章「薄伐西戎」（付表 48）の集伝「薄之爲言、聊也」によるものであろう。『類聚名義抄』「聊」字には「いささか」というこれも定訓が存在する。資料(2)～(5)および(7)～(9)の新注にもとづく訓読では、たとえほかの「薄」字を「しばらく」

と読んでも、出車・五章「薄伐西戎」（付表 48）および出車・六章「薄言還歸」（付表 49）の「薄」字を「いささか」と読まないものはひとつも無い。出車篇だけは必ず「いささか」と読むのが新注による訓読のきまりになっている。

古注にもとづく博士家の訓読では「薄」は「ここに」とよむのが通例で、これは『類聚名義抄』『色葉字類抄』『倭玉篇』『節用集』『増続大広益会玉篇』などの代表的な古字書に記載がある。古注で「薄、辭也」の訓詁があるのは芣苢・一章「薄言采之」（付表 05）の毛伝である。鄭箋はこれを受けて「薄言、猶我薄也」とする（図 3）。

古注には「薄」を「辭也」とせず「始也」の解をとるものがある。時邁・一章「薄言震之」（付表 92）と有客・一章「薄言追之」（付表 95）に、前者は鄭箋が「薄猶甫也、甫始也」といい⁽⁶⁾、後者についても鄭箋が「王始言餞送之（王始めてこれを餞送せよと言うときに）」という⁽⁷⁾。「はじめ」の訓は『類聚名義抄』にもある。

最後に、『類聚名義抄』『色葉字類抄』『倭玉篇』『節用集』『増続大広益会玉篇』などの古字書群には、「薄」の和訓として、新注にもとづく「いささか」「しばらく」「ほぼ」のいずれも記載がないことには注意しておく必要がある。古字書は原則として古注の訓詁を採録したものだけということになるうか。

4. 惺窩点について

惺窩点詩経の底本は『五経大全』本であった。そのことは、李朝から連れてこられた儒者・姜沆の手筆本いわゆる「姜沆彙抄十六種」の分析を通じて、つとに阿部吉雄 1965 が推測している。さらに、字音の検討を通じて、惺窩が利用した朱子『詩集伝』は単行のそれではなく、大本本の集伝であったことを立証したのが佐藤進 2007 である。

しかし、惺窩点の訓読は『五経』の刊行時に林羅山が付した跋文にも「今世往歳、妙寿院の惺窩膝先生、講学格物の暇（いとま）に、新に訓点を五経に加ふ。…倭訓の古くして易ふ可からざる者の若きに至りては、これに旧点を参じへて尽くは削らざるなり」⁽⁸⁾と言っていることから、古注にもとづく清原家の点などを相当程度

に導入しているとの見方がある。村上雅孝 1998 はそれを訓読語の検討によって立証したうえで、村上雅孝 2005 では清原家の点にない訓読語は、王朝的世界をめざして中古の和語を使用して創造されたとする。

本稿の筆者は一定程度村上説を受け入れるものであるが、清原家等の古訓にない訓読はむしろ朱子集伝にもとづく翻訳によって創出されたことを重視したい。実詞の分析検討については別稿にゆだね、本稿では助字「言」「薄」字についての観察を報告する。

付表を見るとあきらかなように、清の清原家の読み「われ」を藤惺窩点で「ここに」と読み替えているところが圧倒的に多い。惺窩は原則としては「ここに」と読んでいる。

ただ、惺窩点では「言」を不読にするところが少なくない。形式的な目的語「之」などを不読にする処置と同じでものある（付表 05 苺苳の「之」の不読を参照）。付表の番号でみると、「言」を不読にする箇所は 11,12,13,14（漢廣）16,17（草蟲）、19,20（柏舟）、21,22,23,24（終風）、29,30（二子乗舟）、31（定之方中）、33（載馳）、39,40（女曰鷄鳴）、47（七月）、51,52,53（彤弓）、56,57（采芑）、58,59（車攻）、60（庭燎）、61,62,63（黄鳥）、64,65,66,67,68（我行其野）、69（大東）、72,73（楚茨）74,75（采芣）、100,101（有駘）、以上である。これらは同じ詩句の繰り返しに対して同じ点つけることを避けた省略ではなく、積極的な不読であるとみてよい。

この「言」字不読処理は、羅山道春点以降の訓読にはまったく見られない現象であり、惺窩点が平安時代の訓読の特徴を残している顕著な例のひとつである。

次に、惺窩が「言」を「われ」と読む例をみしてみる。

泉水・四章（付表 28）と竹竿・四章（付表 35）は、ともに同じ詩句「駕言出游」の「言」を「われ」と読んでいる。泉水の集伝に「われ」と解すべき注釈がついているわけではない。それにもかかわらず「われ」と読むのは、清原家の読みと同様に「駕言出游」の「駕」字を「ガせよ」と命令文として読むことと関係があるかもしれない。しかし、体例としては例外的である。ちなみに、道春点はそれぞれ「のりものしてここに出でてあそびて」「のりてここに出でてあそびて」であって、「駕」の訓読に命令形を用いていない。

泮水・一章（付表 103）の「言觀其旂」の「言」を「われ」と読んでいるが、同一の句を使う庭燎・三章（付表 60）は不読にしている。集伝は「われ」としないので、体例としては「ここに」と読むか不読にするかが適当な処置であろう。しかし、泮水を含む後半の惺窩点には後に述べるような事情があり、惺窩自身の読みを伝えているかどうか疑わしい。

前述したように、都人士・四章「言從之邁」（付表 76）を「われしたがひゆかん」と読むのは、集伝が「我從之邁矣」と敷衍するのによと考えることができる。その事情は采緑・三章の「言韞其弓」と同「言綸之繩」（付表 78・79）の集伝がそれぞれ「我則爲之韞其弓」「我則爲之綸其繩」と敷衍するのによつて、「われ」と読むのと同じである。これら三例は集伝に根拠がある「われ」である。

しかし、同じ采緑・一章の「薄言歸沐」（付表 77）と采緑・四章「薄言觀者」（付表 80）の「言」を「われ」と読むのは、前節で述べたように芣苢篇の六句に存在する「薄言」を「しばらく（あるいは「ほほ）ここに」と読むのに較べると異常な読み方である。集伝の解釈とは関係なく「言」字を「われ」と読むのは、采緑篇以降はほとんどがそうであり、駟篇（「いはん／ここに」両読）と有駟篇（不読）のみが「われ」と読まぬだけである。数としては二十句なのであるが、采緑篇以降に連続して分布するのには注意が必要であろう。

上記のような読みの分布の片寄りとは、この『詩経』を含む『五経』版本が惺窩の自定した訓点を忠実に反映したものであれば生じなかつたかもしれない。この安田安昌刊『五経』に付した羅山の跋文には「余謂ふ、先生嘗てこれが訓点を為すと雖も、その元本はこれを蔵して出ださず。蓋し其の副、人間に流落して然かあるか」⁽⁹⁾として、副本が流伝して上梓されたことを示唆している。この跋文を根拠として、阿部吉雄 1965 や村上雅孝 1998 は惺窩自身と安田安昌刊『五経』との間に一定の距離を置く⁽¹⁰⁾。

本稿の筆者は、安田安昌刊『詩経』において、都人士篇以下の筆録者はそれ以前の筆録者と異なつてゐたのではないかと推察する。上に述べたように、都人士篇の「言」を「われ」と読むのは集伝に根拠があつて問題はない。しかし、采緑・瓠葉の各篇から小数の例外を除きすべて「われ」とするのは、集伝の内容以外にその理

由を求めてみる必要があるだろう。宋刊本『詩集伝』や明の『五経大全』本『詩集伝』は全二十卷仕立てであり⁽¹¹⁾、その巻だてによって、都人士・采緑・瓠葉の各篇を含む巻十五からは、惺窩点の筆録者が替わったと考えれば、異常な分布の説明がつくのである。

安田安昌刊『五経』は不分卷（百八十一葉）で、①国風②小雅③大雅④頌それぞれの最初の1行は葉を改めて版を起こしているが、①～④それぞれの中では葉を改めない。読むものに都人士篇の前に目立った切れ目があるとは感じさせない造本である。しかし、たとえば官版『詩経大全』全二十巻を例にとって葉数をならべると、① 65 葉② 51 葉③ 52 葉④ 48 葉⑤ 32 葉⑥ 46 葉⑦ 30 葉⑧ 41 葉⑨ 59 葉⑩ 34 葉⑪ 58 葉⑫ 46 葉⑬ 37 葉⑭ 29 葉⑮ 19 葉⑯ 75 葉⑰ 56 葉⑱ 83 葉⑳ 59 葉㉑ 50 葉のようになり、合計九百七十葉となる。都人士篇以降は⑮～㉑にあたり、全三百四十二葉、全体のほぼ三分一強にあたる。

当時の『五経大全』に依存する状況からみて（阿部吉雄 1965）、また、惺窩点は『五経大全』本『詩経』が底本であったという状況からみて（佐藤進 2007）、前半三分の二と後半三分の一とで筆録者を分けたと考えて差し支えないであろう⁽¹²⁾。巻十五から替わった筆録者は、既存の清原家流の点本を参照して「われ」と書き込んだと考えられる（下武篇などに「ここに」と両読併記の例もある、付表 87・88）。羅山が「副本の流落」と言ったのも、このあたりに不純な成分を認めたからなのである。

ここで、惺窩点の助字「言」「薄」字の訓読を観察した結果をまとめておく以下のようになる。

- (1) 「言」は原則として集伝の「言、辭也」にもとづいて、「ここに」と読む。
- (2) 「言」は場所によって「不読」の処理をしている箇所がある。
- (3) 『詩集伝』巻十五以降の筆録者は「言」に「われ」を追記した。
- (4) 「薄」は日本の古字書にない「しばらく」「いささか」「ほぼ」を使用した。
例外は采緑・一章「薄言歸沐」（付表 77）のみ「（ここに）われかへりモクせん」。

5. 道春点について

本稿で使用した道春点は承応二年刊官版『詩経大全』と享保十八年刊『新刻校正五経』本である。官版以後天保年間まで約九十年間に、道春点『五経』と称するものは、江口尚純 2003 によれば八点ほど存在する。享保十八年刊はその第七番目にあたり、今回使用する二点は言わば最初と最後に近い道春点の資料ということになる。

林羅山は慶長九年（1604）二十二歳で藤原惺窩に入門する以前から朱子学を学んでいた。惺窩の紹介で徳川家康の蔵書を管理する職に就いてから、朝鮮舶載の朱子学書を縦横に利用して、次第に仏教を許容し陸王学を許容する惺窩とは距離を置いて、より一層徹底した朱子学の究明・導入に傾いていった。ただ、『十三経注疏』の校勘作業を行なうほど古注にも通じており、若年のころには『古文尚書』などを清原家から借りて写し取っていたこともある（この段はすべて阿部吉雄 1965 による）。

まず、付表にはあらわれない道春点『詩経』の訓読を惺窩点と較べると、以下のような特徴をもっている。

第一に、漢字音の読み仮名が一切ないことである。佐藤進 2007 において、惺窩点の導入した朱子叶韻説を検討したが、羅山は字音で如何に読んだのか、官版『詩経大全』からはその手がかりが得られない。ただし「新刻校正五経」本『詩経』にはところどころに字音の仮名が付されている。とは言っても叶音説にもとづく字音仮名は一切ないので、羅山は叶音で読まなかったと推測される。後人の点本を参照しても、惺窩点以外には、叶音字音にもとづく日本漢字音は見られない。

第二に、おびただしい文選読みがみられる⁽¹³⁾。惺窩点にも文選読みは豊富に存在したが、その徹底さは惺窩点を上回るであろう。關雎・一章の四句を例にすると、羅山は「關關とやはらぎなける雎鳩のみさごは、河のすにあり、窈窕としづかにただしき淑女のよきをとめは、君子の好逑のよきたぐひなり」と読んでいる⁽¹⁴⁾。付表の挙例には文選読みは多くないが、付表 11「楚」字を「ソのいばら」、13「蓼」

字を「リヨのよもぎ」、47「糞」字を「ソウのいのこ」とするのがその例である。平安時代からあったこの文選読みは、むしろ平安の古訓によりも羅山の訓読に多く、羅山の訓読における擬古的な特徴であるとされる（築島裕 1963）。

第三に、惺窩点のような両読併記が少ないことである。これはむしろ惺窩点本が特殊なのであろう。村上雅孝 1998 は、博士家の点に近い訓読と、和語をふんだんに使った訓読とが本来は別行していたものを、安田安昌刊『五経』で一本にまとめられたという仮説を述べる。おそらくその通りであろう。

第四に、苜蓿・一章「薄言采之」（付表 05）の「之」字のような形式目的語は、惺窩点と同様に不読にする。しかし、付表^林を通覧すると、惺窩点には存在した「言」字の不読が存在しない。読み仮名がない部分もあるが、それは前の句に出てきたものと同じとみて省略したまでである。同一の篇の中で、類似句の最初のものが空白になっている箇所はない⁽¹⁵⁾。

さて、道春点では「言」字は、原則的に「ここに」と読まれている。原則と異なるものを見てゆくと、簡兮・三章「公言錫爵」（付表 26）では「ここに」と「いはく」の両読にしている。これは惺窩点でも同じで、踊り手に爵を賜う礼として「公」が直接に賜うのはあり得ないとみて、「さかづきを賜え」と命じたという解釈をしているのであろう。

一方、惺窩点か朱子集伝に忠実に「われ」と読んだ都人士・四章「言從之邁」（付表 76）、および采緑・三章の「言韞其弓」と同「言綸之繩」（付表 78・79）のみつつの「言」は官版『詩経大全』ではすべて「ここに」と読んでいる。しかし、「新刻校正五経」本『詩経』では「われ」が追記される⁽¹⁶⁾。羅山の講学の場では「われ」と読まれたものが反映されたものと考えられるが、「新刻校正五経」本以前の各種の版本を追跡した上でなければ確かなことは言えない。なお、「新刻校正五経」本でこうした「われ」の追記が行なわれたのは、ほかに文王・六章「永言配命」（付表 85）がある。さらに、「ここに」に実詞の「いはん」を追加して両読にした駟・一章と駟・二章の「薄言駟者」（付表 96・97）がある。これらはすべて惺窩点と同じものなので、後になって惺窩点を参照しつつ追記したとみてよい。

「薄言」の「薄」は「薄之爲言、聊也」の集伝が出てくる出車篇の手前まで「し

ばらく」と読み、その後は駟篇以外をすべて「いささか」と読むという、まことに特異な現象を呈する。ただし、「新刻校正五経」本では「いささか」に「しばらく」を追記する。

「言」「薄」の道春点の特徴を以下にまとめておく。

- (1) 「言」の不読処理は存在しない（形式目的語「之」は不読にする場合がある）。
- (2) 「言」は、朱子集伝の「我」敷衍にもかかわらず、原則として「ここに」と読む。
- (3) 時代の下る道春点刊本は上記「ここに」に「われ」等を追記する。
- (4) 「薄」は、「しばらく」、「薄之爲言、聊也」の集伝がつく出車篇（付表 48）以降は原則として「いささか」。

6. 闇齋点について

山崎闇齋は、土佐で南学派の朱子学を学び、のちに神道と儒学との合一を旨として垂加神道を開き、朱子学を実践的なものとしてとらえて、幕末の思想家に多大な影響を与えた。闇齋の朱子学は、(1)李朝の大儒・李退溪の全著作を読みこんで形成されたこと、(2)朱子の学説は朱子自身の著述について見ることを強く主張し、四書や五経の『大全』は「末疏」であるとして退けたこと、(3)講義資料としては『小学』『近思録』『四書章句集註或問』『易本義』に限定したこと、などの特徴をもつ（阿部吉雄 1965）。また、訓読史上の闇齋点の特徴については、近藤啓吾 1986 が『論語集注』の道春点と対照し、単に訓読語の検討に終わるのではなく、構文の管到⁽¹⁷⁾の検討を主とした優れた分析をしている。

闇齋点の『詩経』は弟子の雲川弘毅の改定（あるいは改正）とするものがほとんどで、この改定がどの程度のことを意味するのかは分からないが、この改訂版以外について見るべきものはない。とりあえず、全体にわたる特徴をまとめると以下のようなになる。

第一に、形式目的語「之」もすべて「これを」と読み、不読にしない。

第二に、漢字音の仮名はつけない。

第三に、仮名はすべて和訓に関わるもののみであるが、極めて難読の字句に限る。

第四に、關雎・一章の四句を例にすると、闇斎は「關關たる雎鳩は、河の州にあり、窈窕たる淑女は、君子の好き速（たぐ）ひ」と読んで、文選読みは行なわない。

さて、「言」字についてみると、きわめて機械的に「ここに」であることが見て取れる。「ここに」以外の訓は、駟篇の一章から四章までにおいて「いはん」としているのみである。駟篇の「言」は、惺窩点においても道春点においても助字「ここに」ではなく、実詞の「いはん」と読む訓を併記しているので、その解に従ったものと思われる。そうすると、ほぼ百パーセント「ここに」と読んだことになり、後述するように次代の後藤芝山や佐藤一斎がひとつの例外もなく「ここに」と読む先河をひらいたとみてよい。「言」と「薄」の訓読は以下のようになる。

- (1) 「言」は、きわめて機械的に「ここに」と訓む。
- (2) 「薄」は「薄之爲言、聊也」の集伝がつく出車篇（付表48・49）と、48と同じ語構成をとる六月「薄伐」（付表54・55）だけが「いささか」で、ほかは全て「しばらく」と訓む。

ここでは上記のような簡単な指摘にとどめるが、闇斎点をめぐってさらに綿密な検討と位置付けが課題であろうと思われる⁽¹⁸⁾。山崎闇斎については、思想史上の研究に較べて、訓読史上の研究は充実しているとは言い難い現状である。

7. 松永昌易「集伝」点について

松永昌易は、藤原惺窩の四大弟子（いわゆる四天王）、林羅山・那波活所・松永尺五・堀杏庵のひとり、松永尺五の息子である。前述したように、昌易の訓点については、寛文版のそれは道春点に極めて近いという研究がある（村上雅孝2005）。

本稿で参照した寛政版点本は『新刻頭書詩経集注』、すなわち『詩集伝』の点本である。ただ道春点が参照した二十卷本『詩経大全』と異なり、ここでは通行の八卷本『詩集伝』を底本にしている。欄外標注に明・王崇慶『詩経衍義』など朱子以後の説を数多く引用しているのが大きな特徴である。

全体を通じての特徴は、第一に、形式目的語「之」はすべて「これを」と読み、

不読の箇所はない。第二に、漢字音の仮名がなく、文選読みはしない（寛文版にはある）。第三に、和訓は闇齋点より数多く付され、難読の読み方を示すというよりは、初学者向けに、正しい解釈に導く措置になっている。

「言」「薄」字の読み方の特徴は以下のようなになる

- (1) 「言」に不読の箇所はない。
- (2) 「言」字は駒篇「薄言駒者」の「言」を実詞で「いはん」と読むほかはすべて「ここに」。
- (3) 「薄」は郷・谷風と有客のみ「しばらく」（理由不明）、ほかはすべて「いささか」。

村上雅孝 2005 で寛文版の昌易点は道春点に極めて近いが、寛政版は道春点から遠ざかっていると言うとおり、ここでの検証結果も、第一・第二の特徴は道春点とは異なる訓読になっている。また、(3) の特徴、「薄」をほとんどすべて「いささか」とするのは闇齋点の「薄」をすべて「しばらく」とするのと内容は異なるが、一字一訓の方向で訓読しており、処理の仕方は同じである。ただし、集伝の意図は出車篇のみを「いささか」としているので、ほぼ全篇を「いささか」と読むのは朱子の意図とは異なる訓読であると言わざるを得ない。これはあるいは、道春点が出車篇以降の「薄」をすべて「いささか」と読んだ処置を受けた可能性があるろう。

8. 芝山点（後藤点）・一齋点について

後藤芝山は 1737 年に、佐藤一齋は 1793 年に、それぞれ昌平坂学問所に遊学して林家の学問を受けた⁽¹⁹⁾。

江戸時代も寛政期になると、古学派・太宰春台の『倭読要領』（享保十三年 1728）が刊行されてほぼ半世紀を過ぎ、昌平坂学問所における訓読もすでに道春点の改定では間に合わなくなってきた。また学問所では、「寛政異学の禁」を強化する目的で「素読吟味」という試験を課すようになるが、そこで使われたのが「林家正本」と銘打った芝山点（後藤点ともいう）の四書五経であって、芝山点が以後広く普及したのはそのためだという。芝山点には、音読化・上代語法の不使用・過剰な読み添えの削除・不読をなくする、などの特徴があるという（鈴木直治 1975）。以下に簡単な例を挙げる。

- (1) たとえば「成事」を「なれること / なりしこと」などと読まず音読みにする。
- (2) 「欲」を「…まくほつす」のような上代語法を使わず「…んとほつす」のように読む。
- (3) 「則」に「ときは」を読み添えることをやめ、「…すればすなはち」と読む。
- (4) 目的語の「之」などを不読にしない。

芝山点本『詩経』は欄外標注に反切と直音による音注と漢字による訓詁がつけられている⁽²⁰⁾。ただし、音注では叶韻説はすべて除かれており⁽²¹⁾、漢字音の傍仮名もない。訓については、欄外の漢字訓詁のほかに、極めて難読の語には本文に読み仮名を付す（泉水・三章の「牽」に「くさびさす」など）。難読語以外にはほとんど和訓をつけず、送り仮名だけを付すのみである。

佐藤一斎は芝山点本の刊行時に序文をつけているように、一斎点は芝山点の延長上にあるとみてよい。しかし、欄外標注は使用せず、反切と直音による音注と漢字による訓詁を本文に双行夾注のかたちで示す。音注には叶韻反切も示しているが、漢字音の仮名はない。仮名による和訓はほとんどなく、難読語であっても、送仮名が表示されるだけなのでどのような和訓をあてるべきか分からない。そもそも一斎点は漢学の専門家向けの読み方であって、芝山点よりもいっそう日本語として特殊な文になっているという（鈴木直治 1975）。ただし、難解な語には訓を添える芝山点が一般向けに広がる一方、至簡な一斎点は専門家向けに幕末から明治にかけてひろく受け入れられた由である。

さて、「言」および「薄」の読み方については、闇齋点が駟篇において「しばらくいはん」とするのと異なる以外は、芝山点一斎点ともに闇齋点と同じ読み方をする。

9. まとめ

以上、『詩経』における「言」字とそれに関連する「薄」字の訓読の変遷を見てきた。その結果、以下のような特徴があることを結論としておきたい。

- (1) 「言」については、藤原惺窩は「ここに」と不読を併用、采緑篇以降では「わ

れ」とも読む。林道春は不読にするところはなく、集伝が「我」と敷衍する箇所もすべて「ここに」と読む。山崎闇斎・松永昌易・後藤芝山・佐藤一斎も原則的に「ここに」と読む。

(2) 「言」の分析を通じて、藤原惺窩点本の安田安昌刊『五経』の都人士之什（『詩経大全』巻十五）以降は、筆録者が交代して古注派の読みを添えたであろうことが推察される。

(3) 「薄」については、藤原惺窩は「しばらく」「ほぼ」「いささか」の三種に読む。林道春は、「薄之爲言、聊也」の訓詁がある出車篇の手前まで「しばらく」、その後は原則として「いささか」と読む。山崎闇斎・後藤芝山・佐藤一斎は出車篇「薄伐」「薄言」と六月の「薄伐」のみ「いささか」、ほかはすべて「しばらく」と読む。松永昌易は原則として「いささか」と読む（谷風と有客のみ例外的に「しばらく」）。

すなわち、『詩経』に一箇所だけ存在する「薄之爲言、聊也」という集伝（今回調査した「薄」字の第12字目につけられた）をめぐって、(一)そこを境にして和訓をかえる、(二)その箇所（または語構成）にのみ集伝を反映させる、(三)その集伝をほぼ全書に反映させる、という三種類の対応の仕方が存在する。

(4) 訓読史上において山崎闇斎の果たした役割を再評価する必要がある。山下実 1965・村上雅孝 1976・近藤啓吾 1986 などの先行研究があるが、特に、原文の文法構造をいかに分析して読んだかという観点から訓読史を考え直すことが求められる。

【参考文献】（著者の日本語読み五十音順）

〔著書〕

阿河準三 1982：『後藤芝山』（後藤芝山先生顕彰会）

阿部吉雄 1965：『日本朱子学と朝鮮』（東京大学出版会）

大坪併治 1981：『平安時代における訓點語の文法』（風間書房）

岡田武彦（監修）2002：『佐藤一斎全集』巻9（明德出版社）

近藤啓吾 1986：『山崎闇斎の研究』（神道史学会）

鈴木直治 1975：『中国語と漢文－訓読の原則と漢語の特徴』（光生館）

田尻祐一郎 2006：『山崎闇斎の世界』（ぺりかん社）

築島裕 1963：『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』（東京大学出版会）

日尾荊山 1835：『訓点復古』（1978年勉誠社複製）

村上雅孝 1998：『近世初期漢字文化の世界』（明治書院）

村上雅孝 2005：『近世漢字文化と日本語』（おうふう）

〔論文〕

江口尚純 2003：江戸期における詩経関係刻本書目（暫定版）、『中国古典研究』48（早稲田大学）

佐藤進 2007：藤原惺窩点本『詩経』における朱子叶音説とその所拠本、『日本漢文学研究』2号
（二松學舎大学）

聞一多 1948：匡齋尺牘、《聞一多全集》甲集「神話與詩」（開明書店）

村上雅孝 1976：山崎嘉点の性格、『文芸研究』82（日本文芸研究会）

山下実 1965：聞齋点とその後の点法の展開、『鈴峯女子短大人文社会科学集報』12

註

- (1) 筆者は惺窩が導入した朱子叶韻説について考察したことがある（佐藤進 2007）。叶韻説によって字音を掲げたのは惺窩の前に例がなく、惺窩の後にも例がない。漢字の訓読みのみならず字音までも朱子に準拠しようとした、注目すべき現象である。
- (2) 江戸期の和刻本『詩経』関係書の目録は江口尚純 2003 参照。ただ、この目録は『五経大全』には触れない。
- (3) 文王・六章「永言配命」句（付表 85）を「使其所行無不合於天理、則盛大之福、自我致之、有不外求而得矣（その行なふところをして天理に合はずといふことなからしむれば、すなはち盛大の福、我れよりこれを致す、外に求めずして得ることあり）」と解するなかの「自我」は詩句中の「言」の敷衍ではない。
- (4) 築島裕 1963・大坪併治 1981 両書の返点送仮名つき原文を、ここでは書き下して示した。
- (5) 今の中国では聞一多 1948 の解にもとづき「薄言」＝「急急忙忙地（いそいで・あわてて）」とするものが少なくない。
- (6) ここにつけられた集伝は「使我薄言震之」。「我」が挿入されているが、「薄言」をいかに読んだかということとは不明である。
- (7) 古注の「薄」については茱苳・第一章の毛詩正義が以下のように述べる。：毛傳言「薄、辭」、故申之言「我薄也」。「我」訓經「言」也、薄還存其字、是為「辭」也。言「我薄」者、我薄欲如此、於義無取、故為語辭。傳於「薄汗我私」不釋者、就此衆也。時邁云「薄言震之」、箋云「薄猶甫也、甫始也」。有客曰「薄言追之」。箋云「王始言餞送之」。以「薄」為「始」者、以時邁下句云「莫不震疊」、明上句「薄言震之」為始動以威也。有客前云「以繫其馬」、欲留微子。下云「薄言追之」、是時將行、王始言餞送之。詩之「薄言」多矣。唯此二者以「薄」為「始」、餘皆為「辭」也。
- (8) 今世往歳、妙壽院惺窩膝先生、講学格物之暇、新加訓點于五經……至若倭訓之古而不可易者、參之舊點而不盡削之也。
- (9) 余謂、先生雖嘗為之訓點、而其元本藏之不出。蓋其副流落人間而然乎。
- (10) ただ、村上雅孝 1998 は惺窩自筆の訓点を加えられたとされる慶長古活字版『詩経』と比較して、古活字版と安田安昌刊『詩経』と共通するところが大きいとしている。ただし和訓については、後人の補入か、惺窩自身のものか、慎重に判断を避けている。

- (11) 幕末明治以降に利用された通行本『詩集伝』は全八巻である（武英殿版など）。わが漢文大系本『詩経』は古注にもとづく全二十巻なのであるが、中の集伝は通行の八巻本にもとづくもので、集伝の本来の構成が分かりにくくなっている。
- (12) 叶韻説にもとづく字音においては、「言」字のような分布の片寄りは見られなかった（佐藤進 2007）。
- (13) 中国の注の「…貌」を参考にしたことから「かたちよみ」というのが古い用語である。
- (14) 体言の場合は「…の〔+体言〕」と「の」をつけて読み、用言の場合は「…と〔+用言〕」のように「と」をつけて読む。
- (15) 惺窩点では付表 09 のように最初の句から空白が見られるのでそれを不読と判断した。
- (16) 手もとの享保 18 年刊本には「言綸之繩」（付表 73）に「われ」は見えないが、ほかの「言」の仮名を参照すると、脱落であろうかと考える。
- (17) 「管到」とは構文論において他動詞が支配する目的語の範囲をいう十八世紀日本の用語。
- (18) 村上雅孝 1976 は闇齋点に道春点の影響が強いことを述べるが、それは訓読語の継承関係を問題にしたうえでの結論であり、近藤啓吾 1986 が行なったように、構文の解釈や原注との関係から再検討する必要がある。闇齋点の後世への影響については山下実 1965 参照。
- (19) 後藤芝山の伝記・年譜は阿河準三 1982。佐藤一斎の年譜は岡田武彦（監修）2002。
- (20) 阿波の藩儒柴野碧海の「後藤元茂墓表」には「諸儒皆有四書五経点本、但詳於訓点而略於音韻。至芝山先生五経、始掲音註以標其首、読者甚便之」とある（阿河準三 1982）。
- (21) 集伝の本文を載せる道春点官版『詩経大全』、松永昌易『新刻頭書詩経集註』は叶韻音注をかかげるのは当然であるが、一斎点『詩経』の音注でも叶韻の反切・直音を導入している。ただ、漢字音を仮名で示すのは惺窩点本だけである。

○言告師氏言告歸薄汚我私薄漸我
 衣信漸又害又否又歸寧父母又莫後
 賊也言辭也安成劉氏曰如言采言念師女師也
毛氏曰古者女師教以婦德婦言婦容婦功
氏曰賢禮注云婦人五七無子出而不德嫁能以
婦道教人薄猶少也汚顯擗聲平之以法上其汚
者烏媧

図1 葛覃三章古注

図2 同新注

辱之事乃能整治之
 無厭德是其性貞惠
 言告師氏言告
 言歸以婦德婦言婦容婦功
 祖廟未
 理教于公宮三月祖廟既毀教于宗
 室婦人謂嫁曰歸云我告師氏者
 我見教告于女師也教告我以過人
 之道重言我者重宣師教也公宮宗
 室於族一人薄汗我私薄漸我衣
 汗煩
 皆為妻
 燕服也婦人有副神盛飾以朝事第

胡文
 赫赫南仲薄伐西戎
 賦也此言將帥之出征也其室家感時物之變而
 念之以為未見而憂之如此必既見而後心可降
 耳然此車仲今何在乎方征伐西戎而未歸也豈
 既却彼狄而還師以伐昆夷也與薄之為言耶也

図6 出車五章新注

采芣三章肆四句慶源輔氏曰薄猶少焉也雖
薄言采之而采之之多以至
於摘櫻桃焉其形於歌鼓意觀而辭儼然也
則又可見其和平之意矣曰采曰芣則採芣
而既薄之辭曰採曰芣則正采而拘取其子
之辭曰採曰芣則既采而攜以歸之辭○圖

図5 「詩經大全」采芣慶源輔氏曰

采芣采首薄言采之采采芣首薄
 言有之有叶羽
已反

図3 采芣一章古注

図4 采芣一章新注

采采芣首薄言采之
 采采芣首薄言采之
 采采芣首薄言采之
 采取也芣云薄言私芣也
 采采芣首
 采采芣首
 采采芣首
 采采芣首
 采采芣首
 采采芣首
 采采芣首

【附表】

凡例 1：下線で示したのは、原文が同じ詩句なので前句の読みを省略したとおぼしきもの。

凡例 2：両読併記になっているものは「/」で併記した。

凡例 3：道春点で〔 〕のなかに入れたのは新刻校正五経本の訓読。

凡例 4：「薄言」の「薄」は「しばらく」を「ク」、「いささか」を「カ」、「ほほ」を「ボ」で付加した。

凡例 5：網掛けで示したのは、「言」について「ここに」以外の読み方をしているもの。

No: 引 引得番号・篇 詩篇章数・句 原文詩句・惶 惶窩訓読

清 清原家・片 山子点

藤 惶窩点・林 道春点・山 闇齋点・松 昌易点・後 後藤点・佐 一斎点

- 01: 引 2・篇 葛覃③・句 言告師氏・惶 ①こゝに シシにつげて、②こゝに かしづきにつげて
清 われ・片 われ
藤 ここに・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 02: 引 2・篇 葛覃③・句 言告言歸・惶 こゝに かへらんということを まうさしむ
清 われ・片 われ
藤 ここに・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 03: 引 2・篇 葛覃③・句 薄汚我私・惶 ①しばらくわがげのころもをあらい、②ほほわがげのころもをあらい
清 ここに・片 しばらく
藤 しばらく / ほほ・林 しばらく / いささか〔ク〕・山 しばらく・松 いささか・後 しばらく・佐 しばらく
- 04: 引 2・篇 葛覃③・句 薄浣我衣・惶 ①しばらくわがはれぎぬをあらい、②ほほわがはれぎぬをあらい
清 ここに・片 しばらく
藤 しばらく / ほほ・林 ク・山 しばらく・松 いささか・後 しばらく・佐 しばらく
- 05: 引 8・篇 采芣苢①・句 薄言采之・惶 ①しばらくこゝに もとむ、②ほゞこゝに もとむ
清 ①ここに、②われ・片 われ
藤 ク / ボここに・林 クここに・山 クここに・松 カここに・後 クここに・佐 クここに
- 06: 引 8・篇 采芣苢①・句 薄言有之・惶 ①しばらくこゝに えたり、②ほゞこゝに えたり
清 われ・片 われ
藤 ク / ボここに・林 クここに・山 クここに・松 (カ)ここに・後 クここに・佐 クここに
- 07: 引 8・篇 采芣苢②・句 薄言掇之・惶 ①しばらくこゝに ひろう、②ほゞこゝに ひろう
清 われ・片 われ
藤 ク / ボここに・林 クここに・山 クここに・松 カここに・後 クここに・佐 クここに
- 08: 引 8・篇 采芣苢②・句 薄言捋之・惶 ①しばらくこゝに とる、②ほゞこゝに とる
清 われ・片 われ
藤 ク / ボここに・林 クここに・山 クここに・松 カここに・後 クここに・佐 クここに

- 09: 引 8・篇 采芣③・句 薄言結之・惺①しばらくこゝにつまどる、②ほゞこゝにつまどる
 清われ・片われ
 藤ク / ポここに・林クここに・山クここに・松カここに・後クここに・佐クここに
- 10: 引 8・篇 采芣③・句 薄言禰之・惺①しばらくこゝにつまばさむ、②ほゞこゝにつまばさむ
 清われ・片われ
 藤ク / ポここに・林クここに・山クここに・松カここに・後クここに・佐クここに
- 11: 引 9・篇 漢廣②・句 言刈其楚・惺 そのソのうばらをからん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 12: 引 9・篇 漢廣②・句 言秣其馬・惺 そのむまに まぐさかはん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 13: 引 9・篇 漢廣③・句 言刈其萋・惺 そのリヨのよもぎを からん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 14: 引 9・篇 漢廣③・句 言秣其駒・惺 そのこまに まぐさかはん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 15: 引 13・篇 采芣③・句 薄言還歸・惺①しばらくこゝにかへりかへる、②ほゞこゝにかへりかへる
 清われ・片われ
 藤ク / ポここに・林クここに・山クここに・松カ (塗抹) ここに・後クここに・佐クここに
- 16: 引 14・篇 草蟲②・句 言采其蕨・惺 そのわらびをとる
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 17: 引 14・篇 草蟲③・句 言采其薇・惺 そのはらびをとる
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 18: 引 26・篇 邶：柏舟②・句 薄言往愬・惺 しばらくこゝにいてつぐれば
 清われ・片われ
 藤クここに・林クここに・山クここに・松カここに・後クここに・佐クここに
- 19: 引 26・篇 邶：柏舟④・句 靜言思之・惺 しずかにしておもふ
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 20: 引 26・篇 邶：柏舟⑤・句 靜言思之・惺 しずかにしておもふ
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
- 21: 引 30・篇 終風③・句 寤言不寐・惺 さめていねられず
 清われ・片われ

- 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 22: 引 30・篇終風③・句願言則嚏・惺をもつてすなはちはなひる
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 23: 引 30・篇終風④・句寤言不寐・惺さめていねられず
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 24: 引 30・篇終風④・句願言則懷・惺をもつてすなはちをもはん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 25: 引 35・篇邶・谷風②・句薄送我畿・惺しばらくわれをかどきはにおくる
 清ここに・片しばらく
 藤しばらく／ほほ・林しばらく・山しばらく・松しばらく・後しばらく・佐しばらく
 26: 引 38・篇簡兮③・句公言錫爵・惺コウいふ シャクをたまはんと
 清いはく・片いふ
 藤いふ・林いはく／ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 27: 引 39・篇泉水③・句還車言邁・惺①くるまをかへしてこゝにゆかん、②くるまをめぐらし
 て…
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 28: 引 39・篇泉水④・句駕言出游・惺ガせよ われいでてあそんで
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 29: 引 44・篇二子乗舟①・句願言思子・惺をもつてシををもふ
 清いふ (伝) / われ (箋)・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 30: 引 44・篇二子乗舟②・句願言思子・惺をもつてシををもふ
 清いふ (伝) / われ (箋)・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 31: 引 50・篇定之方中③・句星言夙駕・惺ほしみてつとにガせよ
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 32: 引 54・篇載馳①・句言至于漕・惺こゝにサウにいたらん
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 33: 引 54・篇載馳③・句言采其虻・惺そのパウをとらん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 34: 引 58・篇氓⑤・句靜言思之・惺しづかにこゝにをもつて
 清われ・片われ

- 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 35: 引 59・篇竹竿④・句駕言出游・惺ガせよ われいでてあそんで
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 36: 引 62・篇伯兮③・句願言思伯・惺①ねがふこゝにハクををもへば、②ねがつてこゝにハク
 ををもふ
 清いふ(伝) / われ(箋)・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 37: 引 62・篇伯兮④・句言樹之背・惺①こゝにハイにうえん、②こゝにハイのうしろにうえん
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 38: 引 62・篇伯兮④・句願言思伯・惺①ねがふこゝにハクををもへば、②ねがつてこゝにハク
 ををもふ
 清いふ(伝) / われ(箋)・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 39: 引 82・篇女曰雞鳴②・句弋言加之・惺ヨクしてカせば
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 40: 引 82・篇女曰雞鳴②・句宜言飲酒・惺あぢつくらばさけをのんで
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 41: 引 108・篇汾沮洳①・句言采其莫・惺①こゝにそのボをとる、②こゝにそのボをとらん
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 42: 引 108・篇汾沮洳②・句言采其桑・惺こゝにそのくわをとる
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 43: 引 108・篇汾沮洳③・句言采其蕢・惺①こゝにそのシヨクをとる、②こゝにそのをもだか
 をとる
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 44: 引 128・篇小戎①・句言念君子・惺ここに(クンシ)をおもふ
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 45: 引 128・篇小戎②・句言念君子・惺ここに(クンシ)をおもふ
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 46: 引 128・篇小戎③・句言念君子・惺ここに(クンシ)をおもふ
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに

- 47: 引 154・篇 七月④・句 言私其糞・惺 そのソウのいのこをわたくしにし
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 48: 引 168・篇 出車⑤・句 薄伐西戎 いささかセイジュウをうつ、いささかにしのえびすをうつ
 清 ここに・片 いささか
- 49: 引 168・篇 出車⑥・句 薄言還歸・惺 ①しばらくここにかへりかへる、②いささかここにかへりかへる
 清 われ・片 われ
 藤 ク／カここに・林 カ〔カ／ク〕ここに・山 カここに・松 カここに・後 カここに・佐 カここに
- 50: 引 169・篇 小雅・杖杜③・句 言采其杞・惺 ここにそのキをとる
 清 われ・片 われ
 藤 ここに・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 51: 引 175・篇 彤弓①・句 受言藏之・惺 うけてをさむ
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 52: 引 175・篇 彤弓②・句 受言載之・惺 ①うけてのす、②うけてサイ（す）
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 53: 引 175・篇 彤弓③・句 受言囊之・惺 ①うけてつつむ、②うけてゆみぶくろにす
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 54: 引 177・篇 六月③・句 薄伐玁狁・惺 ほほケンインのえびすをうって
 清 ここに・片 しばらく
 藤 しばらく／ほほ・林 いささか〔ク／カ〕・山 いささか・松 いささか・後 いささか・佐 いささか
- 55: 引 177・篇 六月⑤・句 薄伐玁狁・惺 ほほケンインのえびすをうって
 清 ここに・片 しばらく
 藤 しばらく／ほほ・林 いささか〔ク／カ〕・山 いささか・松 いささか・後 いささか・佐 いささか
- 56: 引 178・篇 采芑①・句 薄言采芑・惺 しばらくキをとる
 清 われ・片 われ
 藤 ク不読・林 カ〔カ／ク〕ここに・山 クここに・松 カここに・後 クここに・佐 クここに
- 57: 引 178・篇 采芑②・句 薄言采芑・惺 しばらくキをとる
 清 われ・片 われ
 藤 ク不読・林 カ〔カ／ク〕ここに・山 クここに・松 カここに・後 クここに・佐 クここに
- 58: 引 179・篇 車攻①・句 駕言徂東・惺 ガしてひがしにゆく
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 59: 引 179・篇 車攻②・句 駕言行狩・惺 ガしてゆきてかりす
 清 われ・片 われ

- 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 60: 引 182・篇庭燎③・句言觀其旂・惺そのはたをみる
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 61: 引 187・篇小雅：黄鳥①・句言旋言歸・惺かへんなんかへんなん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 62: 引 187・篇小雅：黄鳥②・句言旋言歸・惺かへんなんかへんなん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 63: 引 187・篇小雅：黄鳥③・句言旋言歸・惺かへんなんかへんなん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 64: 引 188・篇我行其野①・句言就爾居・惺①なんぢについてキヨす、②なんぢについてをり
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 65: 引 188・篇我行其野②・句言采其蓫・惺そのしぶくさをとる
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 66: 引 188・篇我行其野②・句言就爾宿・惺①なんぢについてシクす、②なんぢについてやど
 る
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 67: 引 188・篇我行其野②・句言歸斯復・惺かへりてかへらん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 68: 引 188・篇我行其野③・句言采其蓄・惺①そのヒョクをとる、②そのフクをとる
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 69: 引 203・篇大東①・句言瞻言顧之・惺かへりみてかへりみ
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 70: 引 205・篇北山①・句言采其杞・惺ここにそのキをとる
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 71: 引 207・篇小明③・句言興言出宿・惺をきてここにいでシクす
 清われ・片われ
 藤ここに・林ここに・山ここに・松(脱)・後ここに・佐ここに
 72: 引 209・篇楚茨①・句言抽其棘・惺そのキユクをはらはん
 清われ・片われ

- 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 73: 引 209・篇楚茨⑤・句備言燕私・惺そなはってエンシせり
 清われ / ここに・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 74: 引 222・篇采菽②・句言采其芹・惺そのせりをとらん
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 75: 引 222・篇采菽②・句言觀其旂・惺そのはたをみれば
 清われ・片われ
 藤不読・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 76: 引 225・篇都人士④・句言從之邁・惺われしたがひゆかん
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに〔ここに / われ〕・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 77: 引 226・篇采緑①・句薄言歸沐・惺（ここ）にわれかへりモクせん
 清われ・片われ
 藤ここにわれ・林カここに〔カここに / クわれ〕・山クここに・松カ（脱）・後クここに・
 佐クここに
 78: 引 226・篇采緑③・句言韞其弓・惺われそのゆみをゆぶくろにせん
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに〔ここに / われ〕・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 79: 引 226・篇采緑③・句言綸之繩・惺われこのなわをよらん
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 80: 引 226・篇采緑④・句薄言觀者・惺ほぼわれみてん
 清われ・片われ
 藤ボわれ・林カここに〔カここに / クわれ〕・山クここに・松カここに・後クここに・佐
 クここに
 81: 引 231・篇瓠葉①・句酌言嘗之・惺くんでわれなむ
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 82: 引 231・篇瓠葉②・句酌言獻之・惺くんでわれすすむ
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 83: 引 231・篇瓠葉③・句酌言酢之・惺くんでわれむくう
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 84: 引 231・篇瓠葉④・句酌言酬之・惺くんでわれむくう
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 85: 引 235・篇文王⑥・句永言配命・惺ながくわれメイにハイせば

- 清われ / いはく・片われ
 藤われ・林ここに〔ここに / われ〕・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 86: 引 243・篇下武②・句永言配命・惺①ながくわれメイにハイして、②ながくここにメイにハイして
 清われ・片われ
 藤われ / ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 87: 引 243・篇下武③・句永言孝思・惺①ながくわれカウををもふ、②ながくここにカウあり
 清われ・片われ
 藤われ / ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 88: 引 243・篇下武④・句永言孝思・惺①ながくわれカウををもふ、②ながくここにカウあり
 清われ・片われ
 藤われ / ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 89: 引 256・篇抑⑨・句言緝之絲・惺①われいとをつるにす、②ここにいとをつるにす
 清われ・片われ
 藤われ / ここに・林ここに・山(脱)・松ここに・後ここに・佐ここに
 90: 引 256・篇抑⑩・句言示之事・惺われことをしめす
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 91: 引 256・篇抑⑩・句言提其耳・惺われそのみみをさぐ
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 92: 引 273・篇時邁①・句薄言震之・惺①しばらくわれうごかさしむる、②いささかここにうごかさしむる
 清われ・片われ
 藤クわれ / ここに・林カ〔カ / ク〕ここに・山クここに・松カここに・後クここに・佐クここに
 93: 引 283・篇載見①・句永言保之・惺①ながくわれやすく、②ながくここにやすく
 清われ・片われ
 藤われ / ここに・林ここに・山ここに・松ここに・後ここに・佐ここに
 94: 引 284・篇有客①・句言授之繫・惺われこれにつなぎものをさづけ
 清われ・片われ
 藤われ・林ここに・山(脱)・松ここに・後ここに・佐ここに
 95: 引 284・篇有客①・句薄言追之・惺①しばらくわれをふ、②いささかここにをふ
 清いふとき・片いふ
 藤クわれ / ここに・林カ〔カ / ク〕ここに・山クここに・松クここに・後クここに・佐クここに
 96: 引 297・篇駟①・句薄言駟者・惺①ほほケイたるものをいはん、②しばらくここにこへたくましきもの
 清わが / われ・片いはば
 藤ボいはん / クここに・林クここに〔ク / ボいはん〕・山クいはん・松カいはん・後クここに・佐クここに

- 97: 引 297・篇 駟②・句 薄言駟者・惶 ①ほほケイたるものをいはん、②しばらくここにこへたくましきもの
 清 ①わが、②われ・片 いはば
 藤 いはん / ここに・林 クここに [ク / ボいはん]・山 クいはん・松 カいはん・後 クここに・佐 クここに
- 98: 引 297・篇 駟③・句 薄言駟者・惶 ①ほほケイたるものをいはん、②しばらくここにこへたくましきもの
 清 わが・片 いはば
 藤 ボいはん / クここに・林 クここに・山 クいはん・松 カいはん・後 クここに・佐 クここに
- 99: 引 297・篇 駟④・句 薄言駟者・惶 ①ほほケイたるものをいはん、②しばらくここにこへたくましきもの
 清 わが・片 いはば
 藤 ボいはん / クここに・林 クここに・山 クいはん・松 カいはん・後 クここに・佐 クここに
- 100: 引 298・篇 有駟①・句 醉言舞・惶 えふてまい
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 101: 引 298・篇 有駟②・句 醉言歸・惶 えふてかへり
 清 われ・片 われ
 藤 不読・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 102: 引 299・篇 泮水①・句 薄采其芹・惶 ①しばらくそのせりをとる、②ここにそのせりをとる
 清 ここに・片 いささか
 藤 しばらく / ほほ・林 しばらく [ク / ここに]・山 しばらく・松 いささか・後 しばらく・佐 しばらく
- 103: 引 299・篇 泮水①・句 言觀其旂・惶 われそのはたをみるに
 清 われ・片 われ
 藤 われ・林 ここに・山 ここに・松 ここに・後 ここに・佐 ここに
- 104: 引 299・篇 泮水②・句 薄采其藻・惶 ①しばらくそのもとる、②ここにそのもとる
 清 ここに・片 いささか
 藤 しばらく / ほほ・林 しばらく・山 しばらく・松 いささか・後 しばらく・佐 しばらく
- 105: 引 299・篇 泮水③・句 薄采其茆・惶 ①しばらくそのぬなわをとる、②ここにそのぬなわをとる
 清 ここに・片 いささか
 藤 しばらく / ほほ・林 しばらく・山 しばらく・松 いささか・後 しばらく・佐 しばらく

(以上)